

歯の早期脱落から低ホスファターゼ症診断に至った1症例

○高山扶美子, 山座治義<sup>1</sup>, 小笠原貴子, 野中和明<sup>1</sup>  
 (九大病院・小児歯科・スペシャルニーズ歯科,  
<sup>1</sup>九大・院・小児歯)

【目的】低ホスファターゼ症(HPP)は、組織非特異的アルカリホスファターゼ(ALP)遺伝子異常による先天性代謝性骨疾患であり、骨石灰化の低下等に加え、乳歯の早期脱落が特徴の1つである。歯の異常と骨疾患は関連が深く、医科との連携が求められる。今回我々は、下顎乳前歯の早期脱落を主訴に当科を来院し、小児科での精査の結果HPPと診断された1例を経験した。その治療経過について報告する。

【症例】患児：初診時年齢3歳11か月、男児  
 主訴：下顎乳前歯の早期脱落  
 現病歴：外傷歴はなく、半年前から下顎乳前歯に動揺が生じ、1か月前にB<sub>7</sub>ABの早期脱落を認め、精査加療目的に当科初診となった。  
 既往歴・家族歴：特記事項なし。  
 現症：全身所見；身長94.3cm、体重12.3kg、Kaup指数13.5。特異顔貌や歩行異常なし。  
 口腔内所見；HellmanⅡA期で、既にB<sub>7</sub>ABは脱落し、A<sub>7</sub>は3度、A<sup>+</sup>Aは1度の動揺を認めた。歯肉に炎症所見はなく、脱落乳歯歯根には吸収を認めなかった。エックス線写真にて上下顎前歯部に著明な歯槽骨吸収像を認めた。

【結果】口腔清掃指導を行い、歯周治療を開始した。さらに乳歯早期脱落と全身との関連の有無について、当院小児科に精査を依頼した。受診の結果、血中ALP値および骨密度の低下、尿中ホスホエタノールアミンの著明な上昇、ALP遺伝子のヘテロ変異を認め、HPPと診断された。口腔内については、 $\Gamma$ Aの脱落后、可撤式保険装置の装着を行った。

【考察】今回我々は乳歯の早期脱落からHPPの診断に至った症例に遭遇した。現在、HPPに対する投薬等の治療は開始されていないが、今後は骨症状や運動機能障害が出現する可能性があり、小児科医と連携した長期フォローが必須となる。本症例のように医科との連携によりHPPを早期に発見することで症状出現前からの治療介入が可能となり骨症状等の発症抑制に繋がると考えられた。

上顎右側埋伏犬歯により歯根吸収を生じた中切歯の位置に犬歯を誘導・配列した2例

○向坊友宏, 和田 遥, 玉置華香, 橋本敏昭  
 (はしもと小児・矯正歯科医院)

【目的】小児歯科臨床において、埋伏犬歯が位置異常のみにとどまらず周囲永久歯の歯根吸収を起こしている症例に遭遇することがある。程度は様々であるが、なかには重度の歯根吸収を認め保存困難となることがある。今回、上顎埋伏犬歯による中切歯歯根吸収の為、中切歯抜去後、同部に埋伏犬歯を誘導した2症例を経験したので報告する。

【症例】症例1は初診時年齢10歳9か月の女児で歯科検診希望にて来院。エックス線写真所見より上顎右側犬歯の埋伏と位置異常および同側中切歯に歯根2/3程度の吸収を認めた。

症例2は初診時年齢11歳1か月の女児で上顎前歯部を打撲し来院。エックス線写真所見より上顎右側犬歯の埋伏と位置異常および同側中切歯に歯根2/3を越える、側切歯に歯根1/2程度の吸収を認めた。

【治療・経過】症例1、症例2ともに埋伏犬歯位置はEricsonのsector分類でS5と位置変化が大きく、また上顎右側中切歯の歯根吸収は重度で保存は困難であると判断した。中切歯抜去後、リングアーチを用いて同部位に同側犬歯を牽引誘導、マルチブラケット装置による配列、コンポジットレジン修復による暫間的な修復処置を行った。今後、成長終了後に最終補綴処置を行う予定である。

【考察】犬歯はその歯冠形態の特殊性や顎運動において重要な役割があるため、本来の萌出位置にあることが望まれる。しかし、本来の萌出位置まで誘導する場合、側切歯の2次的な吸収や犬歯移動中の歯槽骨からの逸脱、歯軸の悪化などの問題が生じる可能性がある。今回、埋伏犬歯を中切歯部に異所性に誘導させることでこれらを回避することができ、結果的に犬歯の移動距離を最小限に抑えることで治療期間の短縮にも貢献できたと考える。